

【執筆者略歴】

岩佐 伸一（いわさ・しんいち）

一九七二年、京都市生まれ。一九九四年三月、同志社大学文学部文化学科（日本文化史学専攻）卒業。一九九四年四月より丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、一九九五年四月より岐阜県博物館、二〇〇四年四月より大阪歴史博物館に勤務。学芸員として博物館活動に従事。

川見 典久（かわみ・のりひさ）

一九七六年、兵庫県豊岡市生まれ。二〇〇三年三月、関西学院大学大学院文学研究科日本史学専攻博士課程後期課程単位取得満期退学。二〇〇七年一月より、黒川古文化研究所に勤務。研究員として日本金属工芸史を研究。

杉本 欣久（すぎもと・よしひさ）

一九七三年、京都市生まれ。一九九八年三月、早稲田大学大学院文学研究科芸術学（美術史）専攻修士課程修了。同年四月より、黒川古文化研究所に勤務。二〇〇九年三月、早稲田大学にて博士（文学）の学位を取得。二〇一八年四月より、東北大学大学院文学研究科の准教授として日本近世絵画史を研究。

【編集後記】

創刊号は三編の論考から出発する。岩佐氏にご寄稿いただいた論考は、本誌を方向付けるにふさわしい、まさに「山椒は小粒でピリリと辛い」との言葉が適切な内容である。ご覧いただければ一目瞭然であるが、短文でありながら、論点は明快で至ってシンプル、無駄な論議が一切ないため、文体や流れが小気味よい。最後に付された「上方絵師に関する一枚刷」の一覧表からも、地道な踏査を積み重ねてこられた結果の議論であり、すでに確立されている氏独自の歴史観が反映されたものとお分かりいただけるだろう。川見氏の論考は、日本金工史が専門だとは思われないほど、絵画史にも精通して論じられていることが明らかな内容である。いずれの分野にも資料性に疑問を持たざるを得ない作品が多く混入しているにもかかわらず、不感症のようにそれを良しとする風潮は改めていかなければならない。批判を恐れない研究者としての矜持を持った川見氏の姿勢を、今後もしっかり支持し続けたい。杉本の論考に関しては、またマイナーな画家を取り上げ、これほどの紙面を使うのかとの誇りを受けることが予想される。ただ、その一語で片付くものかどうかは、読者それぞれの判断に委ねることとしたい。少なくとも、周辺資料がこれほど出てくることの意味や、揭示した作品のレベルに関しては、ぜひご考慮に入れていただければ幸いと考える。

（杉本）

日本近世美術研究 第一号

平成三十年（二〇一八）十二月二十五日

発行 一般財団法人北島古美術研究所

京都市上京区石薬師町六八九-八

編集責任 東北大学大学院文学研究科

准教授 杉本欣久

〒九八〇-一八五七六 仙台市青葉区川内二七-一

電話 〇二二-七九五-一六〇六八（直通）

印刷 株式会社東誠社

仙台市宮城野区岡田西町一-五五 仙台総合印刷団地

電話 〇二二-二八七-三三五-一